徳保環セ年報　№26　17－21（2008）

感染症発生動向調査情報による徳島県の患者発生状況（平成19年）

徳島県保健環境センター
石田　弘子・澤田千恵子[1)]

Infectious diseases surveillance reports in Tokushima Prefecture in 2007

Hiroko ISHIDA, Chieko SAWADA

Tokushima Prefectural Institute of Health and Environmental Sciences

Ⅰ　はじめに

当所では，「徳島県感染症発生動向調査実施要綱」に基づく徳島県感染症情報センターとして，徳島県における感染症の発生情報の把握，分析を行っている。分析した情報は週報や月報として医療機関や県民等に還元し，感染症の拡大防止や公衆衛生の向上に努めている。

本報告では，平成19年１月から12月までの患者発生状況について報告する。

Ⅱ　方法

感染症発生動向調査における患者届出対象疾患は，一類から五類の全数把握対象疾患の71疾患，指定届出機関から届出を受ける定点把握対象疾患の28疾患，指定感染症１疾患の計100疾患とした。

感染症の発生情報は，定点把握対象疾患のうち，内科，小児科，眼科及び基幹定点週報分は，月曜日から日曜日までを１週単位で，性感染症定点及び基幹定点月報分は月単位で集計解析を行った。

Ⅲ　結果

1　全数把握対象疾患の届出状況（表１）

(1)　一類感染症

一類感染症の届出はなかった。

(2)　二類感染症

二類感染症は，結核159件の届出があった。月別の届出数は14件～21件で推移していた。年齢階級別では，70歳代が最も多く46件あり，70歳以上で全体の62％を占めている。症状別では，患者が136件，疑似症患者が11件，無症状病原体保有者が12件あった。

(3)　三類感染症

三類感染症は，細菌性赤痢１件，腸管出血性大腸菌感染症19件の届出があった。

①　細菌性赤痢

細菌性赤痢は８月に届出が１件あった。推定感染地域は国外（中華人民共和国）であり，原因病原体は *Shigella sonnei* であった。

②　腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症は19件の届出があった。過去５年間では，平成18年の届出数が集団発生のため49件と多かったが，それ以外の年では10数件の届出数である。届出時期では６～９月が16件と約８割を占めており，気候の高い時期の発生が多かった。患者の年齢

表１　全数把握対象疾患の届出数

類型	疾患名	平成19年	前年
二類	結核	159*	
三類	細菌性赤痢	1	
	腸管出血性大腸菌感染症	19	49
四類	つつが虫病	1	
	日本紅斑熱	2	1
	レジオネラ症	2	
	A 型肝炎	1	1
五類	ウイルス性肝炎(E 型, A 型を除く)	3	
	アメーバ赤痢		5
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1	1
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1	
	後天性免疫不全症候群	3	
	ジアルジア症	1	
	梅毒	1	4
	破傷風		1
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1	

（＊４月から新たに追加となった疾患）

[1)] 現徳島県立中央病院

分布では，５歳未満が全体の半数である９件と多いことが特徴である。症状別では，患者が14件，無症状病原体保有者が５件であった。型別はO157VT１が２件，O157VT２が９件，O157VT１VT２が５件，O26VT１が２件，O111VT１が１件であった。

(4) 四類感染症

四類感染症は，A型肝炎１件，つつが虫病１件，日本紅斑熱２件，レジオネラ症２件の届出があった。

① A型肝炎

A型肝炎は，10月に１件の届出があった。

② つつが虫病

つつが虫病は，12月に届出があり，多く発生するとされている秋～初冬にかけての時期であった。

③ 日本紅斑熱

日本紅斑熱は８月，10月に計２件の届出があった。報告月は，多く発生する時期とされている夏から秋であった。

④ レジオネラ症

レジオネラ症は３月に１件，８月に１件の届出があった。50代の女性と60代の男性であり，病型は共に肺炎型であった。推定感染経路は，水系感染（水道工事業の作業中）１件と不明の１件であった。

(5) 五類感染症

① ウイルス性肝炎（E型・A型肝炎を除く）

A型およびE型を除いた急性肝炎は３件の届出があった。20代が２件，40代が１件であり，そのうち２件の推定感染経路は性的接触であった。病原体はB型ウイルスが２件，サイトメガロウイルスが１件であった。

② クロイツフェルト・ヤコブ病

クロイツフェルト・ヤコブ病（疑い）は11月に１件の届出があった。

③ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は８月に１件の届出があった。病原体は，A群溶血性連鎖球菌であり，感染経路は創傷感染と推定された。

④ 後天性免疫不全症候群

後天性免疫不全症候群は７月～９月に３件の届出があった。年齢は10代，40代，50代が各１件であり，発病期が２件と無症候性キャリア期が１件であった。感染経路は不明が２件であったが，１件は国内における同性間性的接触と推定された。

⑤ ジアルジア症

ジアルジア症は２月に１件の届出があった。患者は80歳代の女性で，推定感染地域は国内であった。感染経路は，山の水を飲用水として利用したことによる水系感染と推定された。

⑥ 梅毒

梅毒は１件の届出があった。患者は30代の男性で，疾患区分は無症候性梅毒であった。感染経路は国内における同性間性的接触と推定された。

⑦ バンコマイシン耐性腸球菌感染症

バンコマイシン耐性腸球菌感染症は９月に１件の届出があった。遺伝子型はVanCであった。

2 定点把握対象疾患の動向（表２）

(1) インフルエンザ

年間患者報告数は6,806件で，前年より減少した。当年の前期流行（平成18年／平成19年）期は，平成19年第６週（2.26件／定点）より流行開始となり，急増して第12週（28.18件／定点）にピークとし，第19週（1.21件／定点）まで流行が続いた。後期流行（平成19年／平成20年）期は，平成19年第48週（1.16件／定点）より流行が開始し，早い時期からの流行開始となった。過去５年間と比較すると，前期流行は遅い時期からの流行となったが，後期流行は，早い時期からの流行開始となった。

(2) RSウイルス感染症

年間患者報告数は831件で，前年比で409％と増加した。前年第47週頃より報告数が増加し始め平成19年第５週（3.61件／定点）にピークを迎え，第13週（0.30件／定点）に向けて減少した。９月に入り，前年より早い時期（第38週頃）より増加し始め，第40週以降，定点あたり1.3件前後で推移し続けた。秋から冬季に多発する傾向が見られ，この時期は全国平均より高く推移した。年齢層別報告数では，６ヶ月未満21.3％，12ヶ月未満19.4％，１歳～２歳未満34.4％，２歳～３歳未満16.6％，３歳以上8.3％であり，乳幼児に多発し重症化する傾向がみられる。

(3) 咽頭結膜熱

年間患者報告数は209件であった。これは，前年比で46.8％と半減した。本年は，前年20週～37週に見られた夏季の流行は明確には生じず，散発的な報告数の増加が見られた。年齢層別報告数では５歳以下が88.0％を占めている。

(4) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間患者報告数は1,238件あり，前年比で123.8％の増加であった。本疾患は，冬季および春から初夏にかけて報告数が増加するとされ，前年と異なり概ねその傾向が見られた。平成19年は全国平均を下回っており，特に年前半では全国平均よりかなり低い水準で推移した。年齢層別患者報告数は，３～９歳で全体の約８割を占めている。

(5) 感染性胃腸炎

年間患者報告数は8,343件あり，前年比で125.1％の増加となった。本年は，前年の第49週にピークとなった後減少したが，第５週よりゆるやかに増加し第９週(13.52件／定点）をピークとしたなだらかなピークを形成し，しだいに減少した。11月に入り報告数が増加し始め第51

表２　内科，小児科，眼科定点報告対象疾患の週別報告数

週	期間	インフルエンザ	RSウイルス感染症	咽頭結膜熱	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	感染性胃腸炎	水痘	手足口病	伝染性紅斑	突発性発しん	百日咳	風しん	ヘルパンギーナ	麻しん（成人麻しんを除く）	流行性耳下腺炎	急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎
1	1／1～	2	28	1	25	225	55		7	11					22		2
2	1／8～	5	25	7	29	175	40		7	18					21		1
3	1／15～	15	50	2	33	203	32		5	18					12		1
4	1／22～	19	63	1	33	210	25		15	18					7		1
5	1／29～	27	83	1	35	184	16		7	12			1		8		2
6	2／5～	86	43	8	37	259	53		9	16					13		
7	2／12～	130	31	3	29	269	26	1	8	12					13		4
8	2／19～	281	23	1	28	248	44		10	16					12		
9	2／26～	381	22		25	311	44	1	12	9	1		2		4		1
10	3／5～	540	8	19	23	270	38	1	1	11					6		1
11	3／12～	961	6	7	31	280	43	3	6	13					6		1
12	3／19～	1,071	3	1	16	194	28		11	7					10		1
13	3／26～	947	7	5	24	219	42		8	17					6		2
14	4／2～	409	4	2	20	164	32		4	7					8		
15	4／9～	284	3	3	21	178	25		5	13	1				7		3
16	4／16～	221	4	1	31	183	14		11	17	4				2		
17	4／23～	241	4	11	36	238	18	1	9	18			2	6	3		
18	4／30～	121	2	5	26	200	38	2	7	14				5	2		1
19	5／7～	46		5	22	149	37	1	14	17				1	1		5
20	5／14～	24	1	6	39	177	38	3	13	10			2	3	3		2
21	5／21～	33	1	4	37	155	50	1	10	15			10		1		3
22	5／28～	21	1	6	33	104	70	5	14	12		1	18	2	1		
23	6／4～	11	1	13	44	129	38	1	15	15	3		14	1	2		2
24	6／11～	7		5	45	77	63	3	17	14			34		4		
25	6／18～	1		6	40	109	32	5	21	31	3		69		2		1
26	6／25～			2	42	54	29	7	19	17	2		90	1	7		2
27	7／2～	1		3	22	94	26	13	13	25			158	4	8		
28	7／9～		1	5	13	39	24	15	17	19	4		191	1	5		3
29	7／16～			4	11	62	27	24	12	15	1		194	1	4		
30	7／23～			2	8	65	14	13	11	14	1		165		3		
31	7／30～			4	8	66	13	22	7	12			104		1		
32	8／6～		4	5	10	82	8	18	9	15			84		3		1
33	8／13～		2	5	6	88	13	8	7	18			60		9		
34	8／20～			4	9	84	8	8	5	15	1		30				
35	8／27～		2	9	6	76	4	1	5	18	2		18		5		
36	9／3～		7	7	9	67	7	2	16	16	1		16		5		
37	9／10～	1	5	2	11	52	7		15	13	1		12		7		1
38	9／17～		14	4	8	50	16	2	6	11			4		5		
39	9／24～		16		11	47	8	1	6	10	1		8		5		
40	10／1～		30		15	57	11		4	14					8		1
41	10／8～		23	1	8	60	8	3	1	12	1		4		2		
42	10／15～		25	3	7	38	13	1	3	10			3		1		
43	10／22～		14	1	19	61	23	2	2	18					8		1
44	10／29～		29	1	26	69	17	2	1	10	1	1	7		1		2
45	11／5～	1	24	8	20	81	27	3	2	14		1	1		3		
46	11／12～	11	30	3	35	93	17	3	3	20	2				1		
47	11／19～	22	26	9	28	122	29	7	1	16							
48	11／26～	44	42		28	261	25	9	1	18	1		3		2		1
49	12／3～	82	24	1	42	357	45	3		14	3		4		2		
50	12／10～	156	37	1	35	459	24	5	4	12	1		4				
51	12／17～	305	30	2	23	471	45	6		12	1		1				1
52	12／24～	299	33		16	378	55	8	2	7			1				
合計		6,806	831	209	1,238	8,343	1,484	214	418	756	36	3	1,314	25	271		47

週（20.58件／定点）をピークとする流行となった。前年と比較して，２月，３月（第６週～第12週）における報告数の増加が目立ち，同時期の全国平均と比較しても高い水準で推移した。

⑹　水痘

年間患者報告数は1,484件あり，前年比で80.7％の減少となった。前年晩秋から冬季の流行に継いだ当年前期の流行は増減しながら晩春の増加期に低いピーク（第22週：3.04件／定点）を迎えるが，その後減少し，８月下旬から10月上旬の底辺経過を経て平成20年に向けて増加した。年齢層別報告数では，10歳未満が大部分を占めており，例年と同様の傾向であった。

⑺　手足口病

年間患者報告数は214件あり，前年比で20％と減少した。本年の発生状況は，本疾患の流行期とされる春から夏にかけて目立った患者報告数の増加はなく，第29週（1.04件／定点）をピークとする低い山で，昨年のピーク時の報告数（第27週，5.30件／定点）と比較すると５分の１であった。年齢層別報告数では，５歳以下の患者報告が全体の93.5％を占めた。

⑻　伝染性紅斑

年間患者報告数は418件あり，前年比で222.3％と増加した。本年は，年始から定点あたり報告数0.3付近を上下しながら推移し，４月から７月にかけて増加し第25週（0.91件／定点）にピークを示した。その後９月（第36，37週）に小ピークを示した以外は，全国の推移と同様に減少した。年齢層別報告数では，３～８歳で72.5％を占めており，幼児と学童低学年を中心に分布している。

⑼　突発性発疹

平成19年の患者報告数は756件あり，前年とほぼ同じ報告数であった。本年の推移は，前年とほぼ同様で季節的変動は見られなかった。年齢層別報告数では２歳未満が96.6％と大部分を占めた。

⑽　百日咳

年間患者報告数は36件あり，前年比で211.8％と増加し，平成16年以降，年間報告数は増加に転じている。年齢層別報告数では，５歳以下11.1％，５～９歳13.9％，10～14歳30.6％，15～19歳2.8％，20歳以上41.7％であった。10～14歳および20歳以上の割合が多く，年長者からの報告割合が増加している。

⑾　風しん

年間患者報告数は３件であり，前年と同じ報告数であった。また，先天性風しん症候群の報告もなかった。第22週，第44週，第45週に１件ずつ報告があったが流行年ではなかった。年齢層別報告数では，すべて15歳以上の報告であった。

⑿　ヘルパンギーナ

年間患者報告数は1,314件あり，前年比で182.8％と増加した。例年夏季を中心に多発する疾患であり，当年の流行は第24週から第34週におよび単峰型流行であった。ピークは第29週（8.43件／定点）であり，前年のピーク（第28週：4.09件／定点）よりも高かった。年齢層別報告数では，３歳以下の報告が68.2％を占めている。

⒀　麻しん

本年は，第17週から第29週に報告があり，年間患者報告数は25件と前年より増加した。年齢層別報告数では，15歳～19歳が全体の６割を占めた。

⒁　流行性耳下腺炎

年間患者報告数は271件あり，前年比で14.1％と減少した。本年は定点あたり１件を越えた週はなかった。

3　眼科定点報告対象疾患の動向

急性出血性結膜炎は，前年に続き報告がなく非流行年であった。

流行性角結膜炎は，年間患者報告数が47件と前年比で51.1％減少した。年の前半に定点あたり報告数１～1.25のスパイク状のピークをつけ，その後は0.75以下で推移した。

4　基幹定点報告対象疾患の動向

⑴　週報告対象疾患

細菌性髄膜炎は，第34週に１件（60歳代）報告があり，前年と報告数は同じであった。

無菌性髄膜炎の年間報告数は，４件（第33週：２件，第43週：１件，第51週：１件）あった。年齢層別報告数は，15～19歳：１件，50歳代：１件，70歳以上：２件であった。

マイコプラズマ肺炎の年間報告数は，２件（第30週：１件，第36週：１件）であった。年齢層別報告数では10～14歳が１件，30歳代が１件であった。

⑵　月報告対象疾患（表３）

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症の年間報告数は，390件あり，前年比150％と増加した。前年は，年間をとおして月20件前後で推移していたが，平成19年では，１月～６月までは前年と同様に月20件前後，７月～12月では月40～60件前後と増加を示した。年齢別では70歳以上が272件と全体の69.7％を占めており，前年と同様の傾向であった。ペニシリン耐性肺炎球菌感染症の年間報告数は，15件であり，前年より増加した。年齢別では，10歳未満が４件，60歳以上８件であった。秋から春にかけて報告されているが，月別報告数は件数も少ないため明らかな傾向は見いだせなかった。薬剤耐性緑膿菌

感染症の年間報告数は２件（すべて70歳以上）であり，前年と同様に報告数は少なかった。

5　性感染症定点報告対象疾患の動向（表４）

性器クラミジア感染症の年間報告数は194件（男性144件，女性50件）であり，前年比で132.0％と増加した。本疾患は性感染症の総報告数の約半数を占めており，性感染症の中では最も多い報告数となっている。年齢別報告数では15～19歳4.6％，20歳代45.9％，30歳代35.1％，40歳代8.2％となっており，20～39歳で全体の80.9％を占めている。

性器ヘルペスウイルス感染症の年間報告数は,57件(男性43件,女性14件)であり,前年比で118.8％と増加した。年齢別報告数では，15～19歳7.0％，20歳代29.8％，30歳代21.1％，40歳代14.0％となっており20～39歳で全体の約半数を占めている。

尖形コンジロームの年間報告数は，68件（男性57件，女性11件）であり，前年比で158.1％と増加した。年齢別報告数では，20歳代39.7％，30歳代33.8％，40歳代10.3％と20～39歳で全体の約７割を占めた。

淋菌感染症の年間報告数は75件（男性66件，女性９件）であり，前年比115.4％とやや増加した。年齢別報告数では，20歳代44.0％，30歳代36.0％，40歳代10.7％であり20～39歳で全体の８割を占めている。

Ⅳ　まとめ

平成19年の感染症発生動向調査に基づく患者発生状況について，その動向を検討した。

全数把握疾患では特筆すべき疾患はなかった。

小児科定点報告対象疾患では，RS ウイルス感染症，感染性胃腸炎，伝染性紅斑，ヘルパンギーナの報告数が前年を上回る大きな流行となった。また，咽頭結膜熱，手足口病，流行性耳下腺炎は前年を大きく下回り，非流行年であった。

眼科定点報告対象疾患では，流行性角結膜炎の報告数が過去５年間で最も少なかった。また，急性出血性結膜炎は報告がなく前年に続き流行は見られなかった。

基幹定点報告対象疾患では一部の薬剤耐性感染症の報告数が増加したが，それ以外の疾患は，前年と比較して大きな変化はなかった。

性感染症患者の年間報告数は394件，前年と比較すると130％と増加しており，平成16年以降，報告数の増加傾向が続いている。このことから，報告の多い20歳代，30歳代を中心に注意喚起をしていく必要があると思われる。

今後も引き続きデータの集積を行い感染症の発生動向に注意していくとともに，適切な情報提供を行っていきたい。

表３　基幹定点（月報）報告対象疾患の月別報告数

	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	薬剤耐性緑膿菌感染症
１月	16	3	－
２月	24	2	1
３月	20	2	－
４月	21	2	－
５月	26	1	－
６月	23	－	－
７月	41	－	－
８月	59	－	－
９月	39	2	－
10月	37	－	1
11月	48	1	－
12月	36	2	－
総計	390	15	2
前年	260	2	4

表４　性感染症定点報告対象疾患の月別報告数

	性器クラミジア感染症	性器ヘルペスウイルス感染症	尖形コンジローマ	淋菌感染症
１月	16	7	10	7
２月	15	4	1	4
３月	17	5	9	4
４月	10	6	5	1
５月	17	4	5	6
６月	17	6	6	5
７月	14	1	2	8
８月	22	5	6	14
９月	22	5	7	12
10月	16	5	9	7
11月	15	4	2	3
12月	13	5	6	4
総計	194	57	68	75
前年	147	48	43	65